

訪れたいまち

福島県相馬郡新地町



東北お遍路（こころのみち）第一号巡礼地「龍昌寺」。
龍昌寺と墓地会の人々が、田んぼの泥のなかから探し出した
墓石で作ったモニュメント（撮影：平成26年2月）

相馬郡新地町

福島県

忘れてしまいたいげんと、忘れねえ
忘れてはなんねえと思ってる

— 紙芝居「命のつぎに大切なもの」より

東日本大震災から3年。
被災地の3年間で本当に知っている
人はどれだけののだろうか。

そしてこれから先、
被災地を忘れずにいられる人は
どれだけいるのだろうか・・・
決して忘れてはならない。

穏やかなまち、新地町

福島県と宮城県の間にある福島県相馬
郡新地町。海も里も山もある小さなまち。
海沿いには家が建ち並び、海水浴客に
水着や浮き輪を売る商店や民宿があつた
り、海の家が続く道があつた。

そして、夏はずいぶん暑くなるわけでは
なく、冬も雪が積もるほどでもない。穏
やかに過ごすことができるまちであつた。

あの日を境に

しかしあの日、あの津波で、まちは一変
した。およそ500世帯が流失し、116
人が亡くなった。役場から見えなかつた2

km先の海は、町並みが消えたせいで今は
目の前に見える。海が生活の一部となつて
いたまちの人々。防潮堤を散歩するラン
ニングシャツ姿のおじさん、犬の散歩をし
ている子ども、釣りに来る人、自転車でぶ
らぶらと来ている人、サーフィンをする人。
1年を通して海のある風景があつた。これ
が一瞬にして奪われたのだ。

被災者

家を流された人、家族を失つた人、ラ
イフラインの途絶で家にいることができ
なくなった人。いろいろな状況の人が、被
災者になった。100人いれば100の
ドラマがあつた。なかには「家は流された
けれど、家族は無事だった」「家族は無事。
亡くしたのは友達など、他人と比べて自
分は泣いてはいけないと、自分の気持ちに
蓋ふたをする人たちもいた。

現実を受け入れるまで

「海のことば憎んでいない。地震が憎い
んだ」——頭では理解しても海に足が向か



川上照美さん(右から2人目)が派遣されている新地町復興推進課の皆さん(平成26年3月現在)。鞆田(ときた)課長(川上さん隣り)を中心に和歌山県や高知県など他県からの支援職員も入り、町の一日も早い復興を目指している。

ない。特に被災した、あの海沿いに住んでいた人たちは、3年が経った今でも、海まで行くことに勇気がいる。なかには絶対に行けないと言っ人すらいる。しかしこのままでは、大好きな海が大嫌いな海になってしまう。それだけは嫌だと心を整理するための作業を始めた人がいる。「しんちビーチ隊」の川上照美さん。ボランティアで海岸清掃(ビーチクリーン)を始めた。「波の音、潮の香り。毎日海を感じて生活する。サーフィンや釣りをするのが当たり前だった主人が、海に行けなくなりました。せつかく釣師つしのキレイな海で育ったのだから、海に戻ってあげたいと思った(川上さん)。「ご主人のために始めたことが、他の人たちにとっても大事な意味を持つようになつていく。」

「震災前の景色しか思い出せないのよ

活動の広がり

震災から2年経過して、「ご主人はサーフィンを再開することができた。今はみんなが海に戻るように活動を続け、なぜこの活動があるのか、地震が起きたらどうすればいいのか、この活動を通して伝えていきたいという。」

「私たちも被災者で、本当だったら悔しくて戻りたくない。見たくないようなも



しんちビーチ隊活動についてはFacebookで。



ね。でも、今はなんにも無い。葛藤。この現実を受け入れるための作業をしているんだと思う(川上さん)。作業をするこ

語り継ぐこと

「自分の役目は伝えることだと思った」と話すのは、地域の語り部として、依頼があれば都合のつく限り出向いてくれる村上美保子さん。

村上さんは海沿いで140年続く旅館を営んでいた。家族は無事だったものの、家、旅館、先祖代々のお墓が流されてしまった。「私の話を聞いてくれる人のなかには、私を支援をしてくださった方がいるかもしれない、他の誰かを支援してくれているかも。福島でなくても岩手や宮城に支援してくれているかもしれない。『ありがとう』を伝えるには当然かなあと考えた(村上さん)。」

出向いた先では被災体験を語ったり、紙芝居で伝えたりしている。「私に語りができなくなっても、この紙芝居を誰かが読んでくれたら、この先もずっと防災にな

る。新地はこうだったってずっと先まで語られていくと思うんです(村上さん)。

東北お遍路(じじいのみち)

観光や物見遊山で被災地を訪れることは難しくても、「四国八十八箇所」のように巡礼であれば訪れることができるのではない。1000年後まで語り継ぎたい巡礼地を被災地から選び出し、慰霊・鎮魂のみちをつくる——というプロジェクトが動いている。「津波のストーリーがあっても黙っていても人が来ないところもある。そういうところに宗教とは全く関係なくスポットを、光をあてたい」。人を呼ぶことができれば、復興の弾みにもなるとして村上さんも参加している。

「ただし、建ててほしくないところには建てない。何十年かしてみんなの気持ち



紙芝居を読む村上美保子さん。絵は村上さんの旅館「朝日館」の被災後の様子。鉄骨の骨組みだけが残った。

が落ち着いて、やはりここも慰霊に訪れてほしいところにならば足せばいい」(村上さん)。数にもこだわらず順次増やしたり減らしたりしていく。

第一号巡礼地

新地町に最初の巡礼地がある。高台にある龍昌寺。ここは流された檀家のお墓を探し出し、境内に積み上げて観音様を奉り「釣師観音」というモニュメントが作られた場所。平成25年6月に第一号の標柱が建った。宮城県にある石材会社の制作で、高さは201mm、幅が31mmと東日本大震災にちなんだ寸法。しかも「三・一一」の模様入りで、上には丸い伊達冠石^{だてかんむりいし}が乗っている。「この丸い石は、宇宙でもあり、魂でもあり、地球でもある。そしてみんなの輪でもあるのです」(村上さん)。

これからの私たちにできること

「とにかく忘れられるのが一番恐い。忘れられたくない。まちがきれいになった



(上から) 朝日館周辺の震災前、震災直後、現在の様子。同じ通りだということが分かるだろうか。また訪れてこの町の復興を見守りたいと思う。

ところだけ見て何がわかるの？ 今の姿も新地。目に焼き付けてほしい」(村上さん)。
 「今年(平成26年)中に東北お遍路のポイントを1市町村1箇所ずつ地図に落としたい。点から線になり、一つの道がつながる。人を呼ぶことができる」(村上さん)。
 私たちにできることは何か—それは決してあの日を忘れることなく、被災した土地を、人々を忘れないでいることなのではないだろうか。
 被災地の復興を祈り、形が整うことを待つのではなく、今の被災地を訪れ、自分の目で見て感じて、忘れない。
 まずは被災地に行こう。そして繰り返し訪れて、自分の目で復興を確かめるのだ。

ようこそ新地町へ

海と里と山がある新地町には
さまざまな楽しみ方がある

海 里 山

やすらぎの時間を



チューリップ祭り(4月下旬)
春から初夏にかけ、美しい花々が咲き誇る。

里

からうさん
鹿狼山(標高430m)
ハイキングから本格登山まで多数のコース。元旦には、約1000人もの登山者が初日の出を見に訪れる。



山

特産品



純米吟醸 鹿狼山
新地町の清水と米を使用。



高糖度トマト
サンゴ砂礫(されぎ)を利用した明治大学の実証事業。すでに販売も行っている。



いちじく甘露煮
いちじくの産地。ほかにシソ巻きやアイス、タルトなども。



かりんとう
こら、ねぎ味噌など種類も豊富。

東北地域観光復興対策事業

国土交通省では、太平洋沿岸エリアの各地域が復興過程に応じた滞在交流促進のための体制づくりや取り組みを段階的に実施できるよう支援を行います。また、訪日外国人旅行促進(ビジット・ジャパン事業)など、今後も引き続き、さまざまな取り組みを通して「観光で日本を元気」にするための支援を行います。



東北お遍路の活動はホームページへ
<http://tohoku-ohenro.jp/>

ふくしまデスティネーションキャンペーン 平成27年4月~6月

平成26年4月からイベントとして3大特別企画が行われます!

その1 花の王国 ふくしま (平成26年6月30日まで)

福島県205の「花の名所」でスタンプを集めると、宿泊券など豪華プレゼントがもらえます!



その2 福が満開、福のしま。 プレゼント&クーポンキャンペーン (平成26年12月31日まで)

パスポートに掲載の福島県内旅館、ホテル、お店でポイントを集めると、県産品など素敵なプレゼントがもらえます!



その3 リアル宝探しイベント in 福島 コードF-4 (平成26年8月31日まで)

地図を手がかりに、福島県内20エリアに隠された宝箱を探す体験型リアル宝探しゲーム。発見すると素敵な特典、発見者賞などがもらえます!



詳しくはホームページへ
<http://www.tif.ne.jp/dc/>

※伊達冠石… 日本でしか産出されない珍しい石。彫刻家イサム・ノグチが使ったとして有名になった。年を経ることで色が変わっていく。